

# 違いをこえたスポーツの実現

太成学院大学 長谷川ゼミ チーム B

○小西 陸 角田 遼 大井川 球道 大野 裕輝

## 1. 緒言

笹川スポーツ財団「スポーツ白書」(2017)によると、成人のスポーツ実施率は伸び悩みがみられる。また、種目別の運動・スポーツ実施率は「散歩」「ウォーキング」「体操」が上位を占めており(表1)、個人で実施する内容が上位に並ぶ。このような状況から、成人のスポーツ実施率を伸ばしていくための1つの方法として、複数の人が集まって運動を実施する機会が必要だと考えられる。また社会の状況を見ると、「多様な人々が共存・共生できる社会を創造する」(多様性を活かすダイバーシティ経営, 16)という理念から、「ダイバーシティ」に取り組む企業が増えてきている。男女が性別に関係なく個性と能力を十分に発揮できる社会を実現することをねらいとして、平成11年に男女共同参画社会基本法が制定されており、「ダイバーシティ」の取り組みの中でも男女の性別の多様性は、比較的早期から取り組まれてきた部分である。しかし、相互理解という部分では十分な実現には至っていないように思われる。

これら2つの課題に取り組む方策として、「男女共習体育」に着目した。障がい者が積極的に社会参加できる社会の実現に向けて「インクルーシブ教育システム」の構築が進められているが、男女の性別においても、学校教育の果たす役割は大きいと考えられる。特に、「社内運動会が再燃」(神奈川新聞, 2015年10月19日)(図1)にあるように、会社内で交流を生み出すため、多様な人々が相互理解をし、共存・共生していくためのきっかけとして、スポーツが活用されている例もみられ、学校体育の「男女共習」が、生涯スポーツの実施率の向上及び社会での相互理解・多様性を深める取組に大きな役割を果たすのではないかと考えた。



図1 神奈川新聞, 2015年10月19日「社内運動会が再燃」

表 1 種目別運動・スポーツ実施率の動向（上位 10 種目）

順位	2006年	2008年	2010年	2012年	2014年	2016年
1	散歩(ぶらぶら歩き) 29.2	散歩(ぶらぶら歩き) 30.8	散歩(ぶらぶら歩き) 34.8	散歩(ぶらぶら歩き) 34.9	散歩(ぶらぶら歩き) 33.0	散歩(ぶらぶら歩き) 32.0
2	ウォーキング 19.7	ウォーキング 22.4	ウォーキング 24.5	ウォーキング 25.0	ウォーキング 25.7	ウォーキング 23.7
3	体操(軽い体操・ラジオ体操など) 16.1	体操(軽い体操・ラジオ体操など) 17.5	体操(軽い体操・ラジオ体操など) 18.5	体操(軽い体操・ラジオ体操など) 20.5	体操(軽い体操・ラジオ体操など) 18.5	体操(軽い体操・ラジオ体操など) 17.3
4	ボウリング 14.8	ボウリング 15.1	ボウリング 13.3	ボウリング 13.0	筋力トレーニング 13.0	筋力トレーニング 13.5
5	筋力トレーニング 8.4	筋力トレーニング 11.1	筋力トレーニング 11.5	筋力トレーニング 12.2	ボウリング 10.0	ボウリング 9.5
6	ゴルフ(コース) 8.1	水泳 9.0	ゴルフ(コース) 9.0	ジョギング・ランニング 9.7	ジョギング・ランニング 9.5	ジョギング・ランニング 8.6
7	水泳 7.5	海水浴 8.9	ジョギング・ランニング 8.5	ゴルフ(コース) 8.3	ゴルフ(コース) 7.5	釣り 7.5
8	ゴルフ(練習場) 7.2	ゴルフ(コース) 8.7	釣り	ゴルフ(練習場) 8.0	ゴルフ(練習場)	水泳 7.3
9	海水浴 6.9	キャッチボール 8.0	ゴルフ(練習場) 8.2	キャッチボール	サイクリング 7.2	ゴルフ(コース) 7.2
10	キャッチボール 6.8	サイクリング 7.9	キャッチボール 8.1	釣り 7.5	水泳	サイクリング 6.7

## 2. 研究の方法と結果

### (1) 文献調査

植月文隆・富岡元信他「男女共習授業についての検討」『東京体育学研究』（1998）

北田豊治「体育科教育における男女共習型授業に関する研究」（2006）

山西哲也「男女共習体育授業の実現の可能性と問題」（2010）

### (2) アンケート調査

調査対象：T 学院大学 健康スポーツ学科 1 年生

方法：質問紙調査

調査内容：中学生時における男女共習体育実施の有無及び共習種目

調査時期：2017 年 8 月

### (3) インタビュー調査

ア. 調査対象：大阪府立 F 高等学校体育教員

調査内容：男女共習体育の実施状況及び可能と考える種目について

調査時期：2017 年 9 月

イ. 調査対象：元中学校保健体育教員

調査内容：男女共習体育の実施状況及び可能と考える種目について

調査時期：2017 年 9 月

### 3. 男女共習体育の現状

男女共習体育の実施率について、植月・富岡ら（1998）は、各都道府県 20 校ずつを選出して調査を行い、約 60%の学校で男女共習授業が実施されているという結果であった。T 学院大学 1 年次生を対象に実施した調査（2017）では、69.3%の学生が男女共習体育を実施していたと回答していた。また北田（2006）は、都道府県別の男女共習体育実施率調査を行った結果、神奈川県の高등학교では共習体育は 88.3%の実施率である一方、大阪府の高등학교では 8.3%の実施率を示し、都道府県間で実施率に大きな差があることが明らかになった。

また北田（2006）は、男女別習校の生徒に対し男女共習を行いたい種目を質問し、「リレー」、「バレーボール」「サッカー」「バスケットボール」の順の回答を得ており、リレーを除き球技が多いことが明らかになった。一方、T 学院大学 1 年次生を対象に実施した調査では、男女共習を実施していたと答えた学生から、共習で実施した種目について、「長距離走」、「短距離走」、「水泳」、「器械体操」、「体づくり運動」の順の回答を得た。生徒の希望種目と実施種目との間にはかい離があることがうかがえる結果となった。

### 4. 男女共習体育への期待と課題

#### (1) 男女共習体育への期待

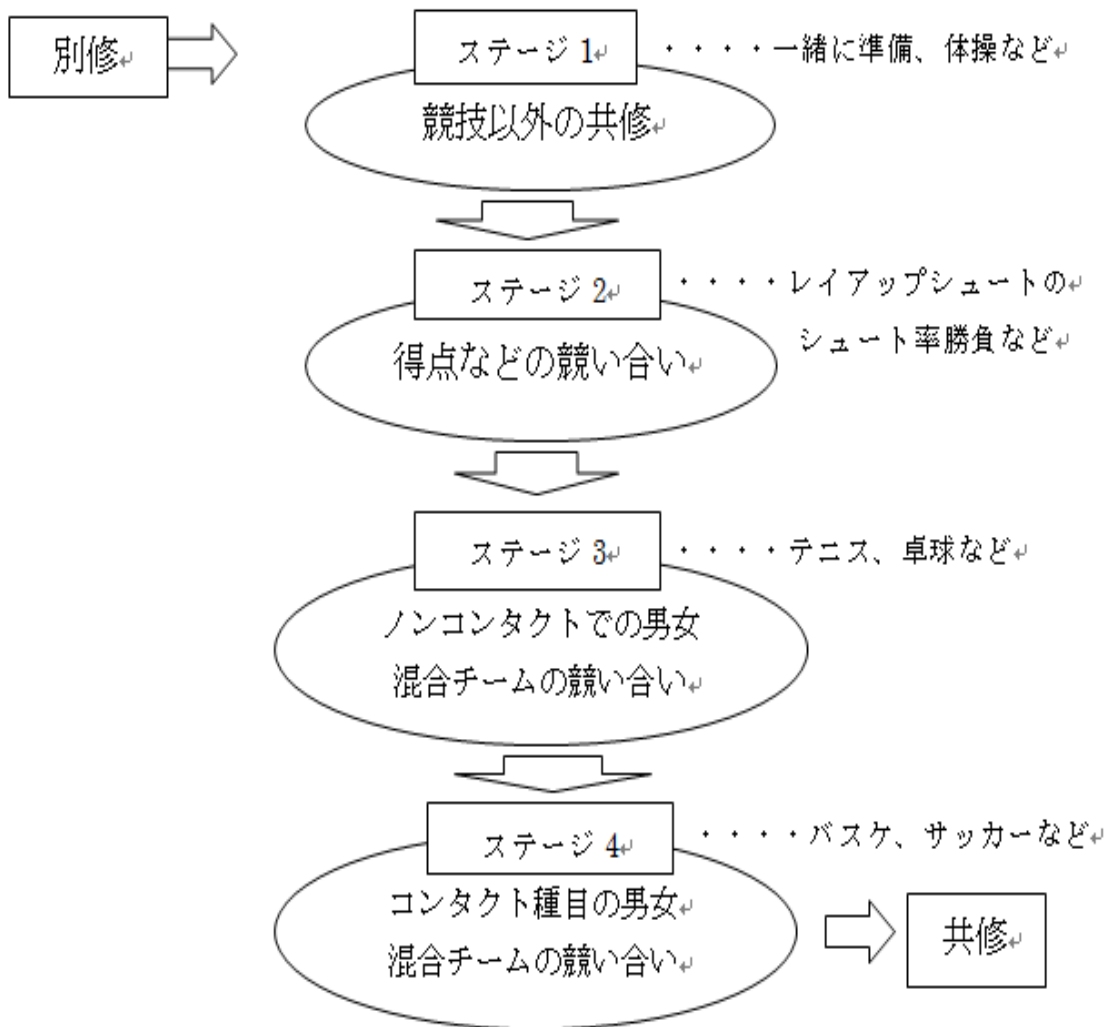
北田（2006）は、教員に対し、男女共習授業を実施した場合に予想される保健体育科全般の効果について調査を行い、「生徒の課題解決能力」、「仲間と協力する態度」、「安全性」の項目においては向上するという回答が高値を示した。男女共習を実施していない学校が数多くあることから、男女共習体育に対して実施効果があるという意識があるにもかかわらず実現できていない状況がうかがえる。

#### (2) 男女共習体育実施に向けた課題

男女共習体育の実施が困難な理由としては、男女の体格差、能力の差に伴う指導の困難さ、コンタクトスポーツにおける接触の問題、男子の技術の向上の低下などがある。共習化しない利点としては少ない教員での指導が可能になることや管理のしやすさなどがある。また、共習体育をすることにより能力、体力差の拡大への指導や種目選択、安全性の確保、男女比や評価の仕方、ルール作成、授業形態の変更などが課題として挙げられる。これらが共習化の困難な理由、課題そして共習化しない理由とされる。

### 5. 提言

男女共習体育実施においては、効果が期待できる反面、実施の上では課題がみられ、都道府県間での実施状況に差が生じ、生徒の希望と実際の実施状況の間にはずれもみられる。これらの点から、男女共習体育の方法を 4 つのステージに分類し、実施のしやすさから、段階的に発展する方法を提案する。



参考文献

- ・ 神奈川新聞「Monday 経済 社内運動会が再燃」2015年10月19日
- ・ 北田豊治「体育科教育における男女共習型授業に関する研究」『愛知学院大学教養部紀要』第53巻1号, 2006
- ・ 笹川スポーツ財団『スポーツ白書』2017
- ・ 植月文隆・富岡元信他「男女共習授業についての検討」『東京体育学研究』1998
- ・ 山西哲也「男女共習体育授業の実現の可能性と問題」『中国四国教育学会 教育学研究ジャーナル』第6号, 2010